現実は小説よりも奇なり

ランドスター

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

現実は小説よりも奇なり

【Ｎコード】

Ｎ９０４１Ｇ

【作者名】

ランドスター

【あらすじ】

能力者とか魔法使いとか悪魔とかが出てくる話です。

一章　『死亡遊戯』　序話

夜の街は孤独だ。

見渡す限り誰もおらず、この世界には自分だけしか存在しないなどと錯覚してしまう。

自分しかいないという状況は、想像力が異常に働いたりする。

あの曲がり角から何かが出て来そうとか、誰かに後を付けられているとか……夜は人の恐怖心を一層に煽ってくれる。

しかし、それが想像で無いとしたらどうだろう。

何かが出てくるというのも、誰かに後を付けられているというのも、全て想像ではなく予感だとしたら――――

◇　◇　◇

赤かった。ただ、ひたすらに赤かった。

黒が支配するこの世界を塗りつぶすかのように、人気の一切無いこの空間は狂気を思わせる赤に蹂躙されている。

一人の男が、壊れたスプリンクラーの如く赤の液体を噴出しているソレの前に立っていた。

唖然と、呆然と、しかし口元は愉悦に歪み。スプリンクラーを見下ろすその双眼は、やはり狂気に満ちている。

右手に握り締めている鈍い光を放つナイフは真っ赤に染まり、男の衣服も真っ赤に染まる。

両手も、顔も赤くなり、しかし男はそれを拭う事はしない。口周りに付着した血を舌で舐め上げ、さらに笑みを深くするだけである。

人間であった。

首と胴を切り離されたソレこそが、壊れたスプリンクラーだった。ソレから漏れる赤い液体は鮮血で、壁や地面、男を塗り潰しているのもやはり鮮血であった。

「ふ、くっ、ハハッ……」

男は嗤う。楽しいのか、可笑しいのか、嬉しいのか、悦ばしいのか、堪らないと言った風に男は嗤った。

ゲラゲラと、腹を抱え、身を捩り、抱腹絶倒の歓喜の雄叫びを声高々に張り上げる。

「アハッ、ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ――

――！！！」

人を殺し、その行為に快楽を見出す狂人。殺人嗜好を持つこの男は、まさに狂人と呼ぶに相応しい。
哄笑を上げようとも、既に住民のいない廃アパートに誰かがいる筈も無く、故にこの男を止められる者は存在しない。
絶頂しそうな興奮を抑え付け、男は一旦笑声を止める。肩を揺らし、湧き出る嗤いを噛み殺しながらポケットに手を入れた。

そこから取り出したのは、何の変哲もない無色のガラスで出来た小瓶。
口の部分にはコルクが詰められ、中はしっかりと密閉されている。
中身は空のようだ。

「Ｓｏｕｌ　ｂｉｎｄｅｒ――
（魂縛り――）」

男は呟き、コルクを抜く。
小瓶の口を開放し、視線を死体へと向けて謳うように呪文を唱えた。

「Ｔｈｅ　ｓｏｕｌ　ｉｓ　ｔｉｅｄ　ｕｐ　ｆｏｒｅｖｅｒ．
Ｔｈｅ　ｐａｉｎ　ｔｏ　ｃｏｎｔｉｎｕｅ　ｗｉｌｌ　ｌｅｔ
ｏｎｅｓｅｌｆ　ｓｕｂｌｉｍａｔｅ　ｂｅｆｏｒｅ　ｌｏｎｇ
ｅｎｄｌｅｓｓｌｙ――
（魂は永久に縛られる。無限に続く苦痛は、やがて其の身を昇華させるだろう――）」

不意に死体が光りだす。まるで、男の言葉に呼応するかのように。
その非日常的な光景を目の当たりにし、男は目を見開いた。
尖った犬歯を外気に触れさせ、裂けんばかりに吊り上がった唇をそのままに男は詠唱を続ける。

「Ｃｏｖｅｔ　ａ　ｓｏｕｌ　ｅｘｈａｕｓｔｉｖｅｌｙ！！
（魂を喰らい尽くせ！！）」

死体より生まれ出ずる閃光の如き白い光を放つ球体。人は此れを魂と呼ぶのだろうか。
幻想的で神秘的で、儚く、脆そうな、見るもの総てを魅了して止まない神が創りし奇跡の産物。
野球ボール程度の大きさのソレは、男の持つ小瓶へと向かって行き、その身を小さくして瓶の中へと収まった。
それと同時に死体の発光は無くなり、やがて男もソレから興味が失せたのか踵を返してその場を後にした。

「クハッ、ヒヒヘッ、ハハッハハハハハ……」

肩を震わせる男の口から鬱屈した嗤い声が発せられる。
それは誰もいない廃アパートに反響し、木霊し、響き渡った。

あとがき

プロローグなんで短めです。

これからボチボチやってこうかなぁと思っとります。

厨二です。それ以外の何物でもありません。

一章　『死亡遊戯』　一話

五月も半ばに差し掛かった今日この頃。
人気の少ない道路の一角に建つ、幽霊でも出そうな不気味な洋館―月光堂―は今日も何時も通り来客する者などいなかった。
そもそも、あの洋館には誰か住んでいるのだろうか――などと思う人も少なくはない。普通の人なら洋館と思う前に、廃館と思うだろう。

そんな感じで廃館にしか見えない月光堂は、今日も独特な空気を放ちながら営業していた。

「見てみろよ、光介」

視線をテレビから外さず、楽しげに口元を歪める赤髪の青年。歳は２０歳前後と言った所か。
完璧に着こなした黒のスーツ。首の下辺りで結われた赤髪。スラッと伸びたその体格は雑誌に載るモデルを髣髴とさせる。いわゆる美人というヤツだろう。
そんな彼は今、いかにも高そうな黒い椅子に堂々と背を預けている。
その傲岸不遜ぶりは、さながら大会社の社長を髣髴とさせる。
年不相応なその態度も、どうして彼がやると有り得ないほど似合ってしまう。それは、一切の隙を見逃さないと言った風な鋭く紅い眼光がそう思わせるのだろうか。

「ん～？」

光介と呼ばれた青年は面倒臭そうに生返事をして、手に持つ某週間少年誌を目の前のテーブルへと置く。
そして気怠げにソファーから立ち上がり伸びをすると、テレビが見える位置へと歩んで行った。

この青年の名は神宮（じんぐう）　光介（こうすけ）。一年前、高校を自主退学した青年である。
先ほどの彼とは違い、黒髪茶眼の生粋の日本人。彼と同じく黒いスーツを着ているが、妙に着崩れている。どうやら服装に関してはルーズな方らしい。

光介は彼の前にあるテーブルに杖代わりに手を置き、興味なさげにテレビを眺めた。

≪――――なお、警察は身元の特定を急いでいます≫

「この事件の被害者は6人でな、全員死んだそうだ。それだけならただの大量殺人なんだが、殺り方が妙なんだ」

「妙？」

光介は眉間に皺を寄せた。彼はそんな光介を一瞥し、楽しげに言葉を続ける。

「ああ。首をぶった切ったり、脳天をかち割ったり、全身をバラバ

ラに切り落としたり……まぁ、全て共通してに言えるのは猟奇的という事だな。どうだ、イイ具合に狂った面白い事件だろう？　――いてっ」

愉快そうに言う彼の頭に手刀を落とし、光介は不快そうに顔を顰めた。

「朝っぱらからグロい話をするなバカヤロウ。ちょっと想像しちまったじゃねぇか」

「それはすまなかったな」

ふっと一笑した後、軽薄な声で謝罪をしつつ、青年はテーブルに置いてあるリモコンでテレビの電源を落とした。
そんな彼の態度を気にする事無く光介は体勢を変え、両手で身体を少し持ち上げてテーブルの上に腰を降ろす。

「行儀悪いぞ」

「お前だっていつもやってるだろ。それより皐月、何で俺にあんな気色の悪いニュース見せたんだ？」

青年―二階堂　皐月―は光介を半眼で見つめ、ニヤリと笑う。

「光介のリアクションが見たかったから――――冗談だ、冗談だからその拳を下ろせ」

今にも顔面へ殴りかかろうとする光介を、皐月は苦笑交じりに諌める。

そんな彼に光介は溜息を一つ吐き、握り拳を解いた。そんな二人の様子から察するに、どうやら何時も皐月はこんな感じらしい。

皐月は徐に引き出しを開けると、そこから数枚の用紙を取り出した。それを光介の方へ軽く放り、用紙はテーブルの上を滑って彼の眼前で止まった。

「先週――と言っても3日前か。その日に起きた猟奇事件、恐らく今回の事件と同一犯だ」

「3日前って言うと……例の首ちょんぱ事件か」

「首狩り魔事件な」

「それだと物騒に聞こえるんだよ。首ちょんぱの方が朗らかでいいじゃんか」

どうでもよさげに訂正する皐月にどうでもよさそうに光介は言い返しながら、3日前の事件を回想する。

首狩り魔事件――5月初旬に発生した殺人事件。廃アパートにて発見された遺体が斬首されていた事から、そう呼ばれるようになった。

新聞や各雑誌にも事件の犯人を『首狩り魔』として大々的に取り上げられた。そのせいか、一躍時の人として世間を賑わす程にまでなっている。

光介は先ほど皐月が自分へと放った用紙を手に取り、それに目を通した。

どうやら何かの書類らしく、目が痛くなるほどに文字の羅列がびっしりと敷き詰められている。

「……これ、全部読まないと駄目なのか？」

目尻をヒクヒクさせ、眩暈すらしそうになるそれに光介は思わず顔を引き攣らせた。

そんな彼に皐月は予想通りと言った風に目を瞑り、苦笑する。

「言うと思ったよ。無理そうなら二枚目だけ読むといい。それで大凡は把握出来るだろうよ」

皐月の言葉に従い、光介は一枚目を捲り二枚目に目を通す。

どうやら二枚目は一枚目の内容を簡潔に纏めた物らしく、基本的に読書は漫画だけという光介も簡単に読む事が出来た。

「げ、特課からの依頼じゃん……」

苦味を噛み潰しように顔を歪める光介。
皐月は懐から取り出した煙草を口に咥え、ふっと笑いを零す。
特課――通称：変人の溜まり場。能力者が関係する事件や事故を専門に担当する事から、この異名が付いたらしい。
能力者は一般に知られていない存在なので、警察内部でもこの課を知る者は極めて少数である。

「蛇の道は蛇という事だな。これまで通り、能力者の協力が欲しいんだろう」

特課に能力者がいない訳ではない。
しかし、犯人と正面から殺り合うような状況になりかねない事件となると月光堂の協力を仰ぐようになっている。
言ってしまうと、皐月や光介達の方が特課の連中よりも荒仕事が得意なのだ。……喧嘩っ早いとも言うが。

「そういやさ、一般人の俺たちに情報漏えいして大丈夫なのか？」

極秘の機関とは言え、一応公式に警察として機能している。
そんな彼らが自分たちのような一般人に金を払って協力を仰ぎ、しかも情報まで流すのは些かヤバイ気がする。というか、実際問題ヤバイだろう。
いかにもマスコミが喜びそうな事柄だ。

「その辺は上も承知しているそうだ。なんでも、月光堂は既に特課の一部になっているらしいぞ」

光介の疑問に皐月は滑稽だと言わんばかりに笑い、答える。
月光堂の主である彼が笑って済ませているのだから、別段気にする事は無いだろうと思い、光介は書類を読み進めた。

「――なぁ、この藤堂って……」

ある名前が目に留まった。
それは光介に読み流せるものではなく、故に今も思考が一瞬停止している。

「お前が考えている通りだ。その藤堂は一年前、お前と殺し合いじみた喧嘩をした藤堂だよ」

「……生きてたのか、あいつ」

嬉しいような悲しいような、よく分からない笑みを浮かべて光介は呟いた。
しかし次の瞬間には気持ちを切り替え、書類を読み進める。

藤堂　啓輔
１７歳　１７６ｃｍ　６０ｋｇ
能力者：能力不明。

経歴：市立中学を卒業後、私立王蓮寺学院に入学。そこで問題を起こし、退学。その後、問題を起こした時に負った怪我で入院していたが脱走。以来、行方不明。
　首狩り魔事件の容疑者であり、今回起こった大量殺人の重要参考人でもある。
依頼内容：藤堂　啓輔の捕獲（生死問わず）

「生死問わずって、随分物騒だな……」

「それはそうだろう。そいつがホシなら、少なくとも既に7人は殺ってるって事だ。世間はお前が思うほど、殺人鬼に優しくはないんだよ」

皐月は懐からライターを取り出し、煙草に火をつける。そして煙を肺に取り込み、深く息を吐いた。
煙草独特の臭いが部屋へ染み渡っていき、近くにいた光介は嫌悪から眉間にしわを寄せる。

「実際の所どうなんだ。お前ら、友達だったんだろう？」

「その過去形で言うのやめろ。俺は今でも友達だって思ってるんだからさ……あっちはどうだか知らんけど」

「屋上で喧嘩したんだろう、しかも夕日をバックに。青春じゃないか」

楽しそうに笑う皐月に嫌気が差したのか、光介はテーブルから降り、事務所を出て行こうと早歩きで出口へと向かう。

「光介」

ドアノブを掴んだ所で、不意に声を掛けられた。
しかし光介は振り向かず、次の言葉を待つ。

「夜の繁華街で蓮山　章ってヤツを探してみるといい」

「なんだ、藤堂の居場所でも知ってるのか？」

「さぁな。少なくとも、手掛かりくらいは知っているんじゃないのか」

恐らく、光介が読まなかった一枚目の方に書かれていたのだろう。
最も、圧倒的に月光堂より人手の多い特課が見つけられない人物を、果たして光介が見つけられるのかと聞かれれば甚だ疑問だが。

「……蓮山　章、ね。わかった」

しかし、光介にそんな事を考える頭は存在しない。
名前を口に出し、短く皐月へ返事をして光介は事務所を後にした。

あとがき

プロットは出来ているんですけど、それを文に起こせているか心配です……

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9041g/

現実は小説よりも奇なり

2010年10月28日03時59分発行